加耶から新羅へ
－韓国陜川三嘉古墳群の土器と葬制について－

高　正　龍

1．はじめに

三嘉古墳群は韓国慶尚南道（慶南）陜川郡の南西部、三嘉面良田里一帯の丘陵上に位置する（図１）。この古墳群に対する詳細な分布調査は実施されていないが、その総数は数百基といわれ、丘陵頂部には直径が数十m級の大型古墳が存在する（図２）。陜川は加耶の故地の一つであり、三嘉古墳群はその規模から見て陜川南部地域における首長墓を含む中心的古墳群と考えられる。

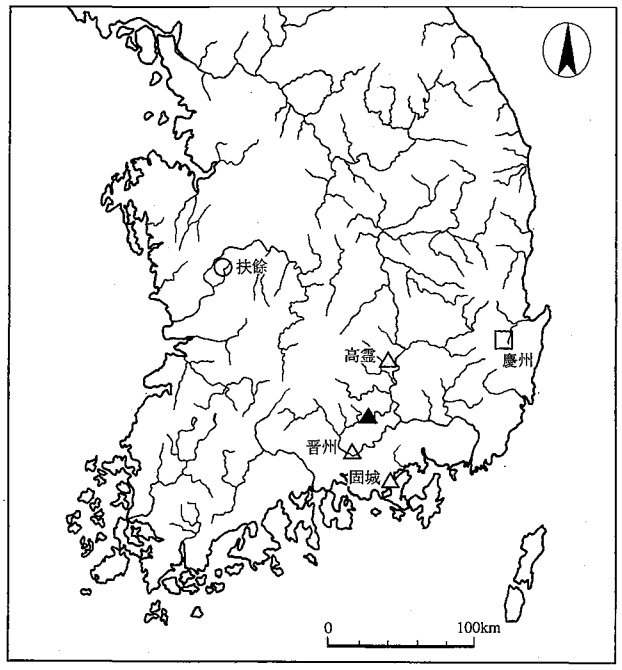

図１　三嘉古墳群の位置（▲）

三嘉古墳群に対しては、1981年東亞大学校博物館によって、丘陵末端部に位置する九基の古墳が発掘調査されている[(1)]。調査された古墳の多くは、一つの墳丘内に複数の墓室をもつ多槨墓とよばれるもので、そのうち１号墳と２号墳では加耶土器を副葬する墓室と新羅土器を副葬する墓室が同じ墳丘内に設置されていることから注目を集めた。陶質土器の研究者[(2)]はそれぞれ加耶土器から新羅土器への転換を、加耶が滅亡し新羅に編入されることが契機になると考え、大加耶の滅亡年である562年頃をその実年代として捉えた。

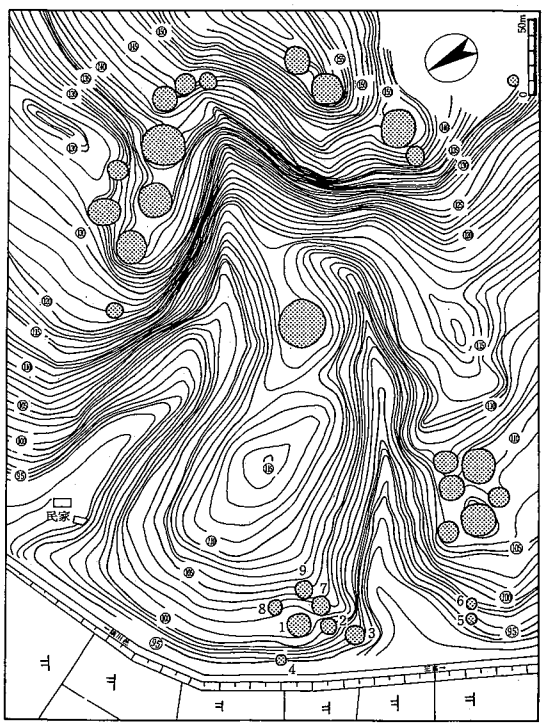

図２　三嘉古墳群の分布（１／5,000）

三嘉古墳群の多槨墓は、墳丘内に追葬のための墓室を新たに設けることによって形成されたもので、家族墓的性格をもつ墳墓と理解されている。三嘉古墳群では土器のみならず、加耶から新羅に移行する時期を前後して、墓制上においても大きな変化が起こる。それは竪穴式石室から横穴式石室への転換であり、墳丘内に追葬用の竪穴式石室

を残すものの横穴式石室が主流となる。

本古墳群は破壊を受けながらも比較的遺物が良好に遺存したものも多いため、多くの研究者が俎上にあげてきた。筆者も三嘉古墳群の土器と葬制に興味を抱き、これらを整理・検討してきたが、その過程でこれまで指摘されていないいくつかの現象に気付いた。これらは断片的であり、これによって新しい「三嘉」像を築き上げる段階にはいまだ至ってはいないが、明らかになった個別の事柄を報告するだけでも資するところもあると信じ、覚書として提出しておきたい。

2．土器型式と墓制

検討に先立ち土器型式と墓制を中心に三嘉古墳群の概要について述べる。三嘉古墳群出土の陶質土器はこれまでの成果から三つに大別できる（図３）。

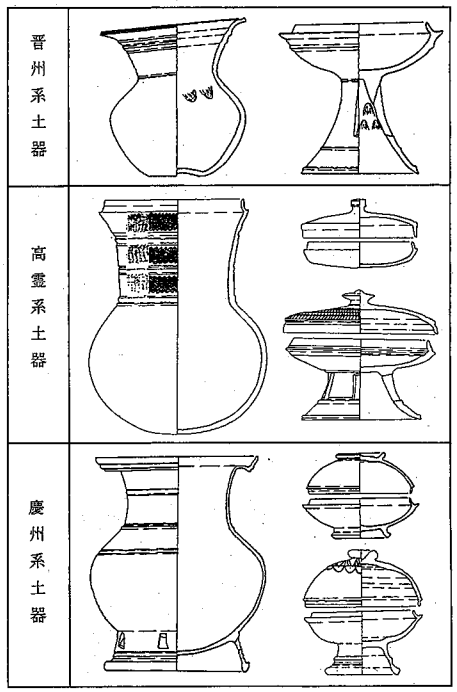

図３　三嘉古墳群出土土器の変遷（１／８）

Ａ群は所謂高霊系土器が入る前の在地加耶土器である。土器の一部は陜川を含む慶南西部地域にその分布の中心があるとされているもので、ここでは晋州系土器と仮称する[3]。三角透窓高杯・蓋・水平口縁（広口）壺・コップ形土器・小型丸底坩などの器種がある。Ｂ群は高霊系土器[4]である。これは加耶時代後期の大加耶（高霊）勢力伸張に伴い、高霊の周辺地域に拡がったものとして、「大加耶連盟[5]」という政治的な結び付きの表徴とみるのが一般的である。主要な器種として長頸壺・蓋杯・鉢形器台・鼓形器台・把手付有蓋鉢などがある。Ｃ群は加耶滅亡以降、旧加耶地域を中心として拡散する新羅土器[6]で、ここでは慶州系土器としておく。主要な器種として高杯・台付椀・付加口縁長頸壺・短頸壺がある。

三嘉古墳群の陶質土器は基本的にＡ群→Ｂ群→Ｃ群という変遷をたどる。三嘉古墳群における土器の変遷は、基本的に他地域から持ち込まれたものであるため、非常に明確な形で変化を目のあたりにすることができる[7]。

ところで慶州系土器としたうち、所謂短脚高杯については百済の影響下に成立した加耶土器として一部で実年代をあげる主張がなされている[8]。しかしながら三嘉古墳群において短脚高杯と伴なう長頸壺は明らかに新羅土器であり、この短脚高杯だけを切り離して百済土器と結びつけるのは難しいと思われる。ただし筆者は新羅土器としての短脚高杯の成立に百済土器が影響を及ぼしたという可能性までは否定しない。

さて東亞大学校博物館によって調査された古墳は９基35室（図４）である。小さな谷をはさんで南北二つの地区に分かれて位置する。北区では１～４号墳、７～９号墳の七基が発掘調査され、南区では５・６号墳の二基が調査された。調査は道路の拡幅工事にともなうものであったが、４号墳は調査時にはすでに全壊しており、周辺より数点の土器が採集されたにすぎず墓室構造も不

明である。埋葬施設の内訳は竪穴式石室（石槨）が26室、横穴式石室が９室である。

古墳は墓室が一つの単槨墓と複数の墓室をもつ多槨墓に分かれる。６・７号墳は単槨墓とされ、１～３・５・８・９号墳が多槨墓である。ただし墳丘が削平され、地下に造られた墓室だけが残った場合、外見上単槨墓にみえることも充分考えられ注意を要する。

以下、古墳造営の契機となった墓室を主室、追加された墓室を従室として、副葬された土器型式を中心に各古墳の概要を簡単にみることにする。なお、１号墳Ａ墓室ならば簡略化して１Ａというように表す。

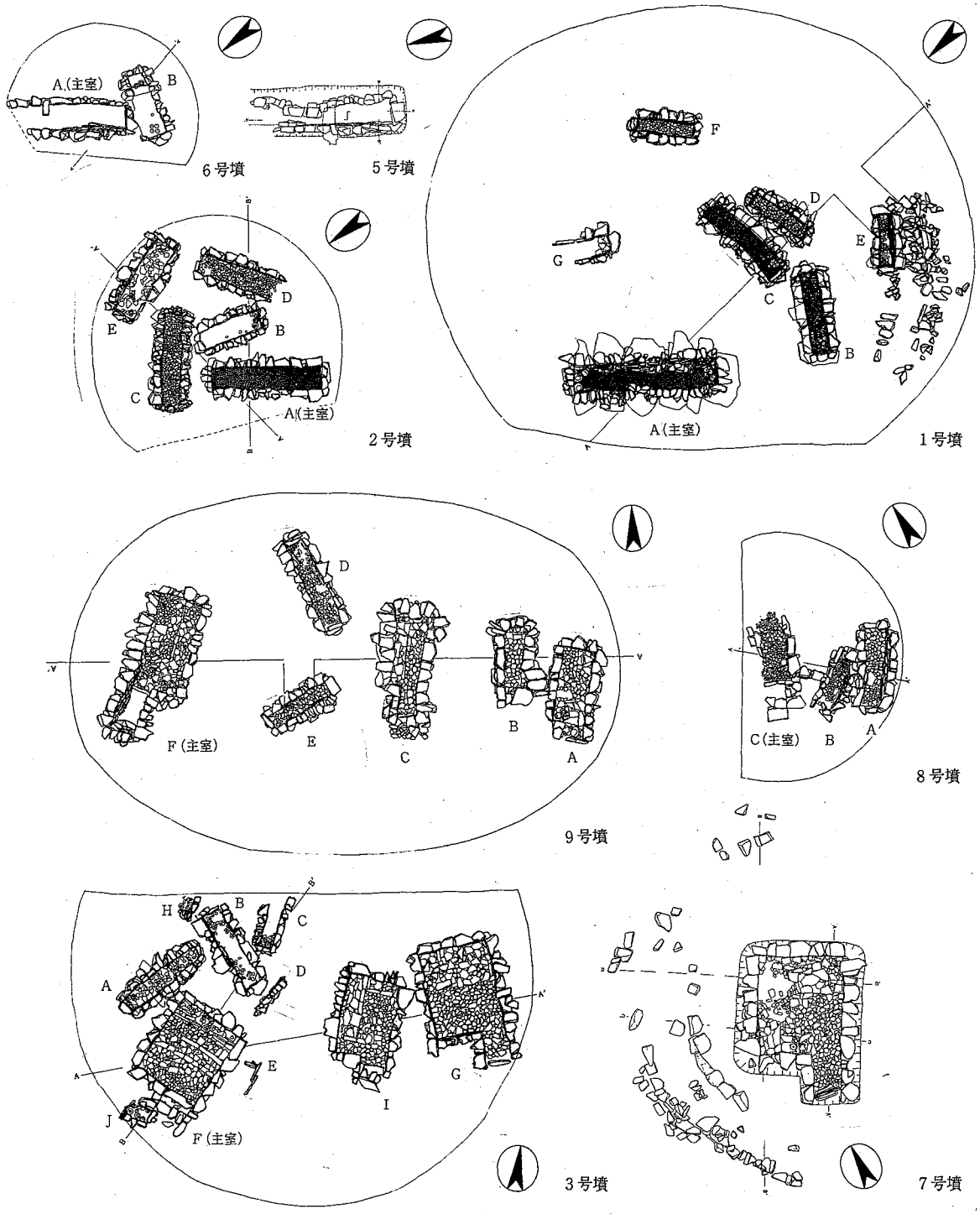

図４　各古墳平面（１／200）

1号墳からは7基の墓室が検出されている[9]。主室Aは地山を掘削した地下式の竪穴式石室で、高霊系土器を出土する。従室はすべて竪穴式石室で墳丘内に造られる。B・C・Gでは高霊系土器が出土し、D・E・Fでは慶州系土器が出土している。また墳丘からは晋州系土器が出土している。これは墳丘版築層内に無意識的に混入したものであるという。したがって1号墳の築造順序はA→（B・C・G）→（D・E・F）となる。1号墳は主室を中心に二重の弧線を描くように従室が配されているが、内側に高霊系土器を納めるもの、外側に慶州系土器を納めるものというように明確に分かれている。墳丘径約17m。

2号墳からは5基の墓室が検出されている。主室Aは地下式竪穴式石室で、従室B～Eはすべて竪穴式石室で墳丘内に造られる。A・Bでは高霊系土器が出土し、C・Eは慶州系土器が出土している。Dには土器が残っていなかったが、2号墳も1号墳と同様に主室に近いものがより時期的に古いとするならば、Dには慶州系土器が納められたものとみてほぼ間違いないだろう。したがって2号墳の築造順序はA→B→（C・D・E）となる。墳丘径約8m。

3号墳からは10基の墓室が検出されている。主室Fは若干地山を掘り下げて構築した横穴式石室で、棺台が四つある。石室は大きく損なわれており出土土器は5点のみであった。土器の内4点は慶州系土器であるが、高霊系土器の高杯1点が含まれている。調査された横穴式石室9基中、唯一の高霊系土器である[10]。Fのまわりには7基の竪穴系の石室（A～E・H・J）が墳丘内に造られている。このうち一基は土器のみを収めるのがやっとの小石室で、報告書ではその台付短頸壺を蔵骨器と捉え火葬墓の可能性を示唆している。また東北側に少し離れて2基の横穴式石室G・Iが位置する。GとIはともに二つの棺台施設をもつ。従室の土器はすべて慶州系土器であるが、B・D・E・Gは盗掘・破壊を受け、土器は全く残っていなかった[11]。墳丘径約14m。

4号墳は調査時にはすでに全壊しており、墓室構造・墳丘規模は不明である。周辺よりいくつかの晋州系土器が採集されている。

5号墳では地山上に造られた地上式の竪穴式石室1基が検出された。調査時には墳丘が大きく損なわれており、現状は単槨墓であるが、多槨墓であった可能性も排除できない。高霊系土器が収拾されている。墳丘規模不明。石室の残存長4.44m。

6号墳からは2基の墓室が検出されている。主室Aは地上式の竪穴式石室である。土器は出土しておらず、その築造時期は不明である。従室Bも地上式竪穴式石室で、晋州系土器と高霊系土器の両者が出土している。おそらく前者から後者への移行期に造られたと考えられる。Aはそれより古い時期に造られたのは明らかであるので、晋州系土器が副葬された可能性があるだろう。墳丘径7m以上。

7号墳では横穴式石室1基が検出された。墳丘西半には土留め用の護石がめぐり、これから墳丘規模を復原すると径約11mになる[12]。慶州系土器が出土している。墳丘上部が撹乱されており、多槨墓であった可能性も否定できない。

8号墳からは3基の墓室が検出されている。主室Cは横穴式石室で、従室A・Bはともに竪穴式石室である。A・Bは地山上に造られている。B・Cからは慶州系土器が出土した。Aは盗掘

により土器が残っていなかった。墳丘径約7.6m。

9号墳からは6基の墓室が検出されている。主室Fは横穴式石室で、明確な棺台が一つある。土器は慶州系土器で、遺物の残りはよい。Fの東側に二基の竪穴式石室D・EがFに対してハの字状に位置し、その東側にさらに3基の横穴式石室C・B・Aがある。AとCには棺台施設が一つずつあるがBにはない。従室から出土した土器はすべて慶州系土器であるが、B・D・Eは盗掘・破壊を受け、全く土器は残っていなかった。石室を東側に次々と増設したためであろうか、墳丘は長楕円形を呈し長径約17mある。

	晋州系土器	高霊系土器	慶州系土器	主室の墓制
4号墳	□			不明
6号墳	[A]？B	B		竪穴式石室
5号墳		□		竪穴式石室
1号墳		[A]・B・C・G	D・E・F	竪穴式石室
2号墳		[A]・B	C・D・E	竪穴式石室
3号墳		[F]	F・A・C・H (B・D・E・G)？	横穴式石室
7号墳			□	横穴式石室
8号墳			[C]・B・A？	横穴式石室
9号墳			[F]・A・C (B・D・E)？	横穴式石室

表1　三嘉古墳群の土器と墓制（□は初築墓室）

以上のように、多槨墓を構成する石室には異なる土器型式を含んでいる。三嘉の多槨墓は墓室を墳丘内に増設することによって形成されるもので、いわゆる殉葬墓ではなく家族墓的性格をもつ。

出土土器の型式ごとに土器と墓制をまとめたものが表1である。

ところで1・2号墳については当初道路側が工事によって削平されたときに、道路側の石室が失われたと見ていた。しかし同じ陜川ダム水没地区の古墳群の調査結果から、主室をかなめとして扇状に墓室が配される墳墓が存在することが明らかになった。たとえば倉里古墳群A41・A62号墳[13]（図5）などがその好例である。多槨墓といえば高霊池山洞古墳群のように中心石室のまわりに多くの石室が周回するようすを想い起こすが、扇状に複数の墓室がめぐる構造もけっして珍しくはないことが判ったのである。

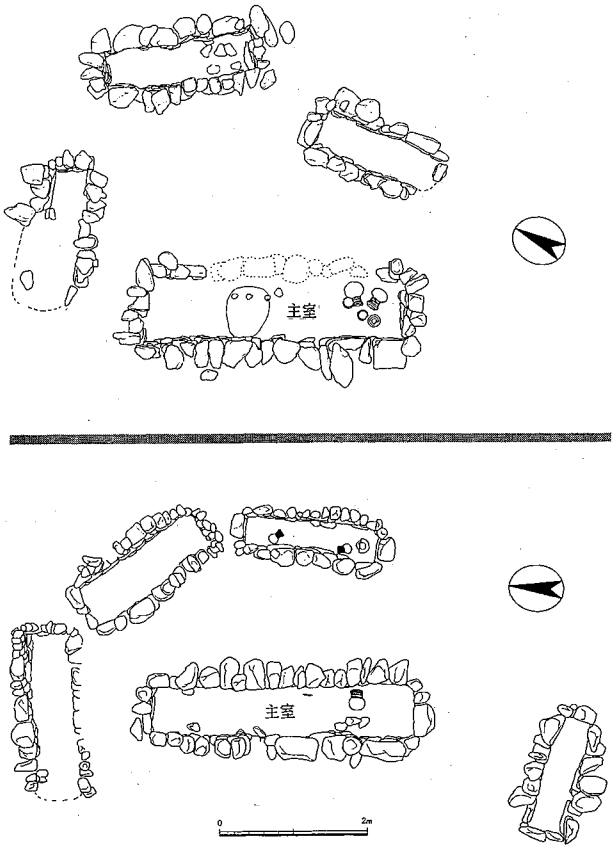

図5　倉里古墳群のA41号墳（下）、A62号墳（上）

三嘉古墳群を構成する墓制は主として竪穴式石室と横穴式石室であり、高霊系土器から慶州系土器への移行期に墓制は前者から後者へと漸次移るが、墳丘内追葬用にはしばらく竪穴式石室を残す。これについて門田誠一氏

は横穴式石室導入の初期において、その埋葬施設のもつ意味や機能を活用できず墳丘内に追葬を続けるものと見ている[14]。また３号墳と９号墳では墳丘内に横穴式石室を新たに設けているのが目を引く。これが造墓活動の制限によるものならば、新羅の地方（加耶）支配を考える上で重要な手がかりとなるだろう。

３．高霊系土器の製作技法と編年

三嘉古墳群出土土器は高霊系土器（図６）[15]の研究者によって研究の対象とされてきた。各研究者は池山洞古墳群に後出する三嘉古墳群の土器を高霊系土器の最終段階に位置付け、６世紀前葉から中葉、すなわち加耶滅亡までの６世紀代の土器とすることでほぼ一致をみている。主要研究者３氏の相対編年を示せば表２になる。

ここでは先学の研究成果をもとに製作工程の省力化という観点から三嘉古墳群の高霊系土器を４期に編年することを試みる。

まず長頸壺の変遷について検討する。三嘉古墳群において長頸壺を出土した墓室は、１Ａ・１

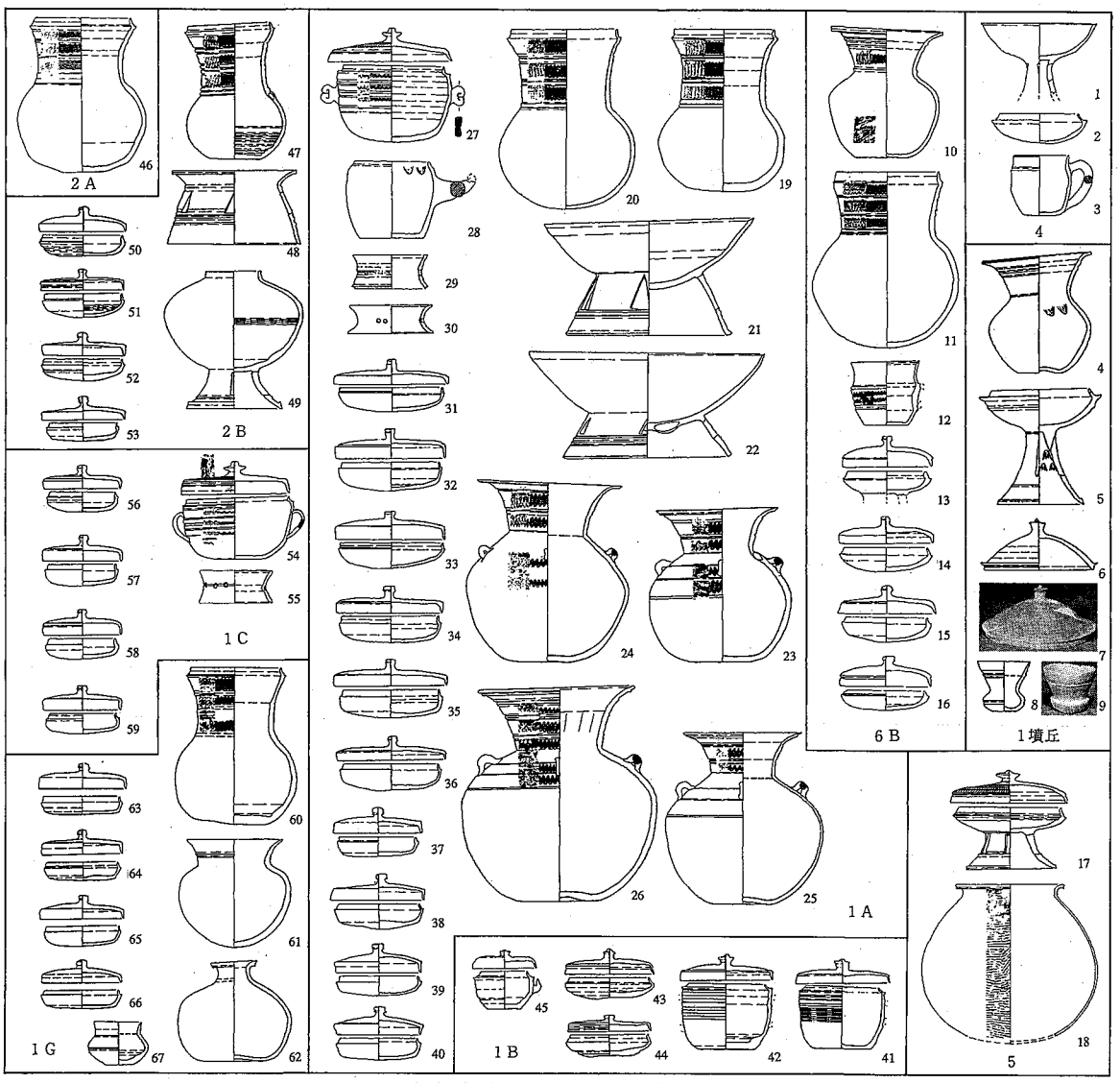

図６　三嘉古墳群出土土器一覧（１）　１／10

藤井	5・6B（Ⅵ期）		1A・1C（Ⅶ期）	1B・2A・2B・1G（Ⅷ期）	
禹	5・6B（Ⅲ段階）		1A・2A・1G	1B・1C	2B（Ⅳ段階）
郭	6B（Ⅱ古）	5（Ⅲ古）	1A・1C・2A・2B（Ⅲ新）		

表2　各研究者の高霊系土器の編年案

G・2A・2B・6Bの5遺構6個体に過ぎず、編年の材料としては不足の感は否めない。しかしながら、長頸壺は高霊系土器の主要器種として研究が進んでおり、以下で記すように加耶末期にいたり長頸壺は器形と技法において変遷が追いやすい。また2Aでは盗掘によって長頸壺しか出土していないため、2号墳の築造（初築）時期を考える上でも長頸壺の検討は重要である。

長頸壺の変遷に関して、藤井和夫氏は球形の胴部が扁球化し、底部が平らに変化するとみて、6B（Ⅵ期）→1A（Ⅶ期）→2A・2B・1G（Ⅷ期）という考えを示した。また禹枝南氏は胴部の形態、胴高と口頸高の比率などを編年の規準として長頸壺の変遷を6B（Ⅲ段階）→1A・2A・1G・2B（Ⅳ段階）に分け、Ⅳ段階の中でも2Bをより新しいものと捉えている。

さて6Bの長頸壺が序列の先頭にくることは高霊系土器全体の流れのなかで極めて妥当である。6Bの短い口頸部と球形の胴部は他の長頸壺よりむしろ高霊池山洞古墳群のものに近いだろう。郭鍾喆氏にいたってはⅡ古段階、5世紀後葉まで遡及させている。これを先頭とすることは各論者が一致しており、筆者も異論の余地がない。

6Bにつづく長頸壺の変遷は、藤井氏が指摘するように胴部の扁球化ならびに底部の平底化にあると見ることができ、このことは遺構の先後関係が明らかな1Aと1Gとの長頸壺の比較から概ね肯定することができる。ただし藤井氏が2Aの長頸壺を平底として扱っているのが論点になる。たしかに2Aのものは外見上は少し平底にみえるが、これは報告書の記載どおり丸底と捉えるほうがよいと思われる[16]。

丸底土器の製作過程を見ると、まず粘土板をおき、それに粘土紐を巻き上げ回転成形を行なう。ついでロクロからはずし底部内側から当て具でうけながら外面をタタキ板で叩いて丸く作り出す。なお胴部下半にタタキが残っていなければ、さらにこれをナデ消す工程が加わったことになる。また小型品の場合は棒状工具で上から突く出すようにして丸底にする場合もあるようである[17]。

ところで三嘉古墳群出土の長頸壺の実測図をみると、1G・2Bには底部内面に平坦面があり、土器の土台となる粘土板の痕跡をよく残し、ロクロによる回転痕跡が明瞭である。これに対して2Aは丸底の6B・1Aと同様に内面が丸く仕上げられている。1G・2B底部内面に明瞭にロクロ痕跡がのこるのは丸底にする工程の省略をよく表わしており、2Aなどにそれが見られないのは底を丸くする過程で当て具やナデによってロクロの痕跡が消された結果と見ることができる。したがってここでいう長頸壺の平底化というのは、丸底化工程の省略によって生じた形態的変化と捉えることができるだろう。

以上のように長頸壺の技法・形態上の変遷をまとめれば、6B→1A・2A→1G・2Bという結果を得ることが可能である。なお1Gと2Bは、禹氏の指摘のとおり2B長頸壺の胴高が口頸高に比べて顕著に小さいこと、小型化するなど器形の差異が著しいので、さらに時期差を抽出

できる可能性がある。

次に最も多く出土する蓋杯について検討を行なう。三嘉古墳群で蓋杯を出土したのは１Ａ・１Ｂ・１Ｃ・１Ｇ・２Ｂ・６Ｂで６遺構27個体である。蓋杯は器形上変化をとらえることは難しい。藤井氏は蓋と杯身ともに偏平化することを一つの標徴と見なしているが、藤井氏が高霊系の最終段階とするⅧ期においても杯身に丸いものが残っているようにその規準は曖昧である。これに対して禹氏は蓋杯の属性としてヘラ削りに着目しその有無から三嘉古墳群の蓋杯を二分している。すなわち禹氏は「遅い時期になると杯身にケズリ技法があらわれる」として、６Ｂ・１Ａ・１Ｇの蓋杯にはヘラ削りがないが、１Ｂ・１Ｃ・２Ｂにはヘラ削りが見られるとする。

ただしこのことはヘラ削り技法の新たな登場を意味するのではない。それまでヘラ削りをナデ消していた工程が省略されたため、それが観察されるようになったと見るべきである。残念ながら三嘉古墳群の蓋杯を詳細に実見する機会を得ていないが、同じ陜川郡の中磻渓墳墓群の高霊系土器の杯の中には、ヘラ削りの後に回転ナデを施したと報告されているものがある[18]。ヘラ削りが観察できないというのは、丁寧にそれがナデ調整された結果であり、三嘉古墳群の最終末にいたりヘラ削りが顕著となるのは、長頸壺の平底化と同じく作業工程の省略によるものと考えてよい。先に長頸壺の形態から１Ｇと２Ｂの時期差を示唆したが、蓋杯においても両者はより明確な差異があり、これが時期差であることを裏付けてくれる。

したがって長頸壺・蓋杯の製作技法上の差異を基準とすると、６Ｂ→１Ａ・２Ａ→１Ｇ→１Ｂ・１Ｃ・２Ｂの四期に編年することが可能になる[19]。６Ｂ以前の晋州系土器を三嘉Ⅰ期として一括し、６Ｂを三嘉Ⅱ期、１Ａ・２Ａを三嘉Ⅲ期、１Ｇを三嘉Ⅳ期、１Ｂ・１Ｃ・２Ｂを三嘉Ⅴ期とする（図７）。なお５号墳は長頸壺と蓋杯が出土しておらず、これに基づく編年はできないが、これまでの研究成果を尊重して６Ｂ併行期としておく。また３Ｆ出土の高杯についても、これだけで判断できるものではないが、墳丘や石室内に収められる他の土器がすべて慶州系土器であるため、連続性を重視すればⅤ期のものとしても間違いないだろう。この高杯も脚部が欠失していることから６Ｂの場合と同

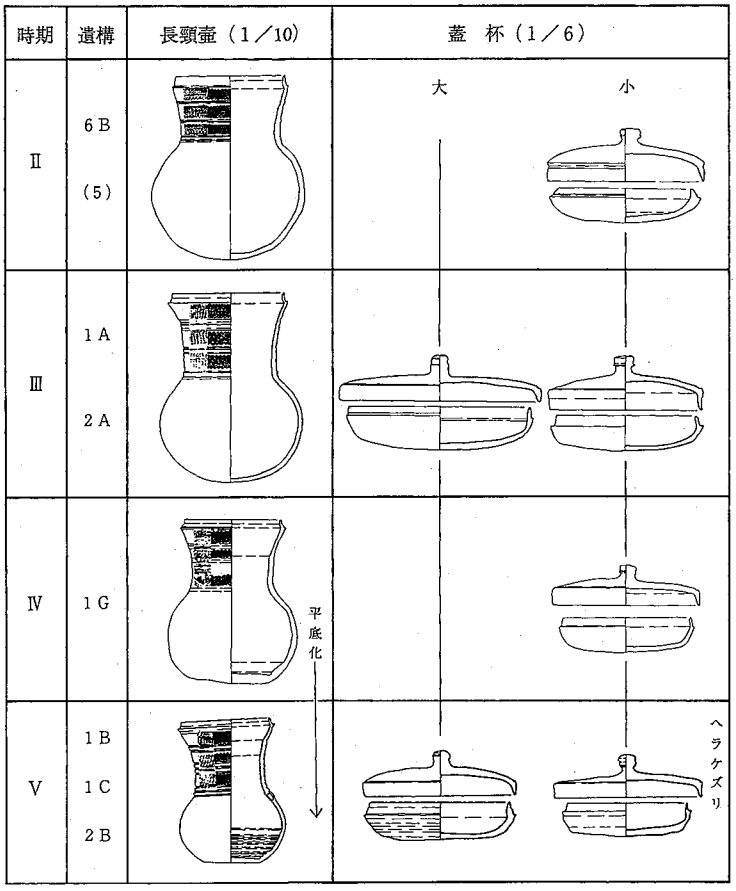

図７　高霊系土器の編年

じく、杯身の代用として使われた可能性が大きいだろう。

前述のようにその実年代は三嘉Ⅴ期の終わりが大加耶の滅亡年である562年頃であること以外拠り所がない。これまでの研究成果から三嘉における高霊系土器の時期は６世紀代に収まるものと推量される。

最後に蓋杯の法量について少し述べておきたい。図８は三嘉古墳群の蓋杯のうち杯身の法量を示したグラフである。口径と器高を表示しており、黒塗りはヘラ削りのあるもの、白抜きはヘラ削りの観察できないものである。まず気が付くことは１Ａ（○印）の法量に二つのまとまりがあることである。平均すると両者の口径差は約2.8cmあるが、容積差では約二倍の開きになる[20]。これについて郭氏は法量の分布様相は杯の法量が一系ではなく、池山洞44・45段階（５世紀後葉）から大・小型品への法量分化が始まると説明している。すなわちこれは同一器形の法量による器種分化と捉えることが可能である。これは後に述べる副葬遺物の数量の検討において重要な意味をもつ。

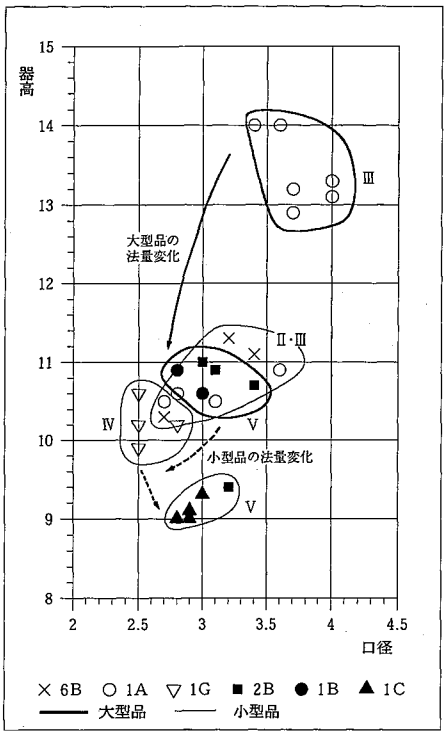

図８　蓋杯法量グラフ

またⅤ期の蓋杯（黒塗）も法量において明瞭に二系のまとまりを認識することができる。その差は口径差が最大でも2.0cmと法量による器種分化と呼べるほどの顕著なものではないが、前代からの伝統を残していると言えよう。グラフではⅡ・Ⅲ期の大型品が欠落しており資料的制約があるが、この推量が正しければ、蓋杯の法量は両者ともに時期が下がるにつれて小型化していく様子をグラフから読み取ることが可能である。

さてこのような蓋杯の小型化は、言うまでもなく粘土の消費を軽減するものであり、先に見た製作工程の省略とともに土器生産の省力化と捉えるべき現象である。このように加耶末期になり、土器生産は着実に製作工程の省略（粗雑化）と法量の小型化の道を歩んでいる。このような現象は一般に生産の増大に伴うものと理解されることが多い。また土器の法量の縮小については政治的混乱に起因する経済水準の低下を反映するものとする見解もある[21]。いずれにせよ加耶の土器生産体制を考える上で重要な論点となるだろう。

４．新羅土器への転換

（１）編年

慶州系土器への移行は新羅土器という土器様式への転換を表わす。三嘉古墳群における新羅土器への転換は急進的なものであるため、征服者である新羅人の移動によって、大量に土器が持ち込まれたという印象を受ける。しかし、詳細に検討を行なうと加耶の人々が主体的に受容した様子を読みとることができるようである。

まず慶州系土器（図９）について編年作業を行なう。三嘉古墳群のこの時期の土器については、

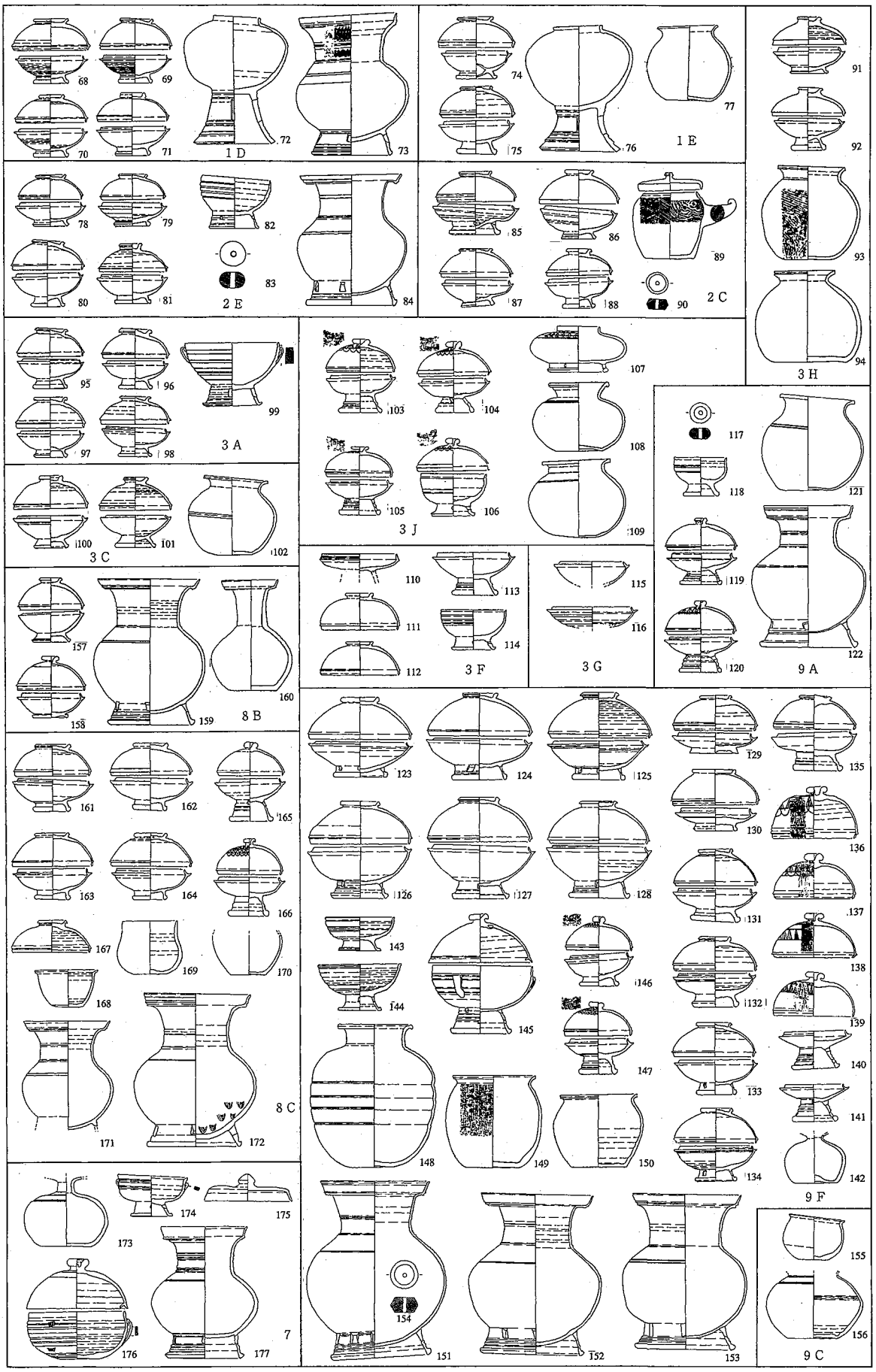

図9　三嘉古墳群出土土器一覧（2）1／10 紡錘車を含む

藤井和夫氏や崔秉鉉氏[22]などの論考がある。藤井氏は陶質土器の特徴から二つのグループに分け、氏の慶州地域で行なった編年との対照から、古いものをおおよそ560～580年、新しい時期のものを580年～７世紀初め頃の年代を与えている。筆者も藤井氏と同じく大きく二つに分けることには基本的に同意見である。ここでは、筆者なりの方法でこれを検証するとともに、これを細分する方向で検討を行ないたい。

新羅期の墓制には横穴式石室と竪穴式石室などがあるが、追葬により遺物の一括性が保証できない横穴式石室のものは一旦除外し、まず竪穴系の墓室のものを検討対象とする。ただし９Ａは横穴式石室ではあるが、遺物の出土状況から追葬が行なわれた形跡がないと考えられるので、この遺構の土器も含める。したがって、１Ｄ・１Ｅ・２Ｃ・２Ｅ・３Ａ・３Ｃ・３Ｈ・３Ｊ・８Ｂ・９Ａの10遺構出土のものがまず検討対象となる。

ここではこれらの遺構から共通して出土する高杯、とくに杯部に蓋受けのある有蓋式高杯ならびにその蓋を規準として編年を試みたい[23]。これら有蓋式高杯を一見してすぐ解ることは、高杯に短脚のものと、やや長脚のものがあり、両者が共伴しないという事実である。このことは時期的な差異を示すものと考えられる。また両者は８Ｂの高杯一例を除き、蓋のつまみの形態も異なる。すなわち短脚の高杯には環状つまみが付く蓋をともない、やや長脚の高杯には小型のらっぱ状になったつまみが付く蓋をともなう。さらに蓋に紋様をもつものはやや長脚の高杯に限定されている。以下短脚のものを高杯Ａ、やや長脚のものを高杯Ｂ、環状つまみをもつ蓋を蓋Ａ、らっぱ状つまみをもつ蓋を蓋Ｂとして記述を進めたい。

さて、この中で３Ｊは横穴式石室３Ｆの羨道を破損させ側壁の石を床にして築かれている。３Ｊは長さ0.7ｍ、幅0.5ｍの小規模な石槨で、土器のみを収めている。報告書では肩部に紋様帯をもつ壺形土器を蔵骨器とみて火葬墓の可能性を考えている。三嘉古墳群では墳丘内に追葬のための石室を構築する場合、主石室の後面あるいは側面に造るのが普通であり、３Ｊのように前面に造られていない。羨道を破壊している点と、３Ｆの前面に造られている点から、３Ｊは３Ｆが追葬を終え横穴式石室としての機能が停止した後に造られたと考えざるをえない。３Ｊには高杯Ｂが収められているので、その先後関係は高杯Ａ→高杯Ｂとなる。ここで問題となるのは、３Ｆ石室内からも高杯Ｂが出土している点である。これは石室内への最終追葬が、３Ｊと接近する時間内に行なわれたためと理解したい。

以上のように有蓋高杯を規準として慶州系土器を二分することが可能と思われる。高杯Ａを指標とする時期を三嘉Ⅵ期、高杯Ｂを指標とする時期を三嘉Ⅶ期とする。ただしここで詳細に検討する余裕はないが、金鍾万氏が指摘するように高杯ＡとＢは系譜の異なる高杯である[24]。よって高杯ＡからＢへの変化は型式学的に連続するものではない。皇龍寺初期土器[25]で見られるように、慶州においては両者は同時併存している。しかし三嘉古墳群においてそれらが時期差を表わすのは、慶州系の高杯を受容する三嘉側の事情によるものと考えられる（後述）。

この中で高杯Ａを指標とする三嘉Ⅵ期は、さらに二つの小期に分けることが可能であると思われる。この時期の蓋Ａにはそのつまみ径に大小の二種がある。つまみ径の大きいものを蓋Ａａ（径

4.7～5.8cm)、小さなものを蓋Ab（径3.3～4.1cm）とする。１Ｅと３Ａには蓋Aaのみ、１Ｄ・２Ｅ・２Ｃには蓋Aaと蓋Ab、３Ｃ・３Ｈには蓋Abのみ、８Ｂ蓋Abと蓋Ｂが出土している。

１・２号墳で見られるように、主室に近い従室がより早い時期に追葬されたことが明らかである。３号墳の場合３Ａ・３Ｃ・３Ｈがその位置関係から３Ａが３Ｃ・３Ｈより早くに築造された可能性が高いだろう。さらに８号墳の初築はⅥ期以降と見られ、いきおい墳丘内に追葬された８ＢはⅥ期でも新しい時期に築造された可能性がでてくる。したがって築造の順序から推定すると、３Ｃ・３Ｈ・８ＢがⅥ期の中でも新しい時期のものであると認定できる。３Ｃ・３Ｈ・８Ｂはいずれもつまみ径の大きな蓋Aaを出土しておらず、蓋Abのみ出土する遺構が、Ⅵ期の中でも新しい時期のものであるという推量が成立つようである。(図10)。

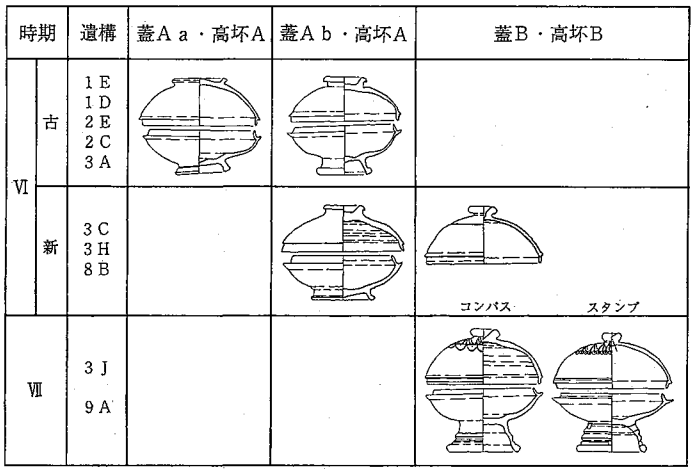

図10　慶州系土器の編年（１／８）

８Ｂでは次のⅦ期の指標となる蓋Ｂも出土しており、８Ｂがより新しい時期のものであることを示している。またこれを規準として小期を設けた場合、古段階には台付直口壺、有蓋把手付鉢といった高霊系土器と共通する器種が残存し、１Ｄでは付加口縁長頸壺の頸部に波状紋をもつといった前段階の土器の要素を残すものがある。このことも小期設定の一つの証左になるだろう。

さて三嘉Ⅶ期も高杯脚部の透孔を穿つ方法において、ヘラで切り抜くのか、断面方形の棒状工具で刺突するのかによって、新旧に二分できる可能性をもつ[26]。しかし残念ながら報告書の写真だけでは判断は難しい。また、蓋にはコンパスで半円紋を描くものと、スタンプによる円紋を描く紋様があるが、基本的にコンパス紋からスタンプ紋へ変化することが崔秉鉉氏によって明らかにされている[27]。しかしながら三嘉古墳群では３Ｊで共存しているように、その初期の段階（崔氏の１段階）はコンパス紋からスタンプ紋へ移行する過度期と位置づけられており、一定度コンパス紋が残るため、土器の編年材料とするのは難しい。したがって三嘉Ⅶ期が細分できる可能性はあるものの、現段階では保留しておきたい。

次にこの分類をもって横穴式石室出土の土器をみることにする。３Ｆ・８Ｃ・９ＦにはⅥ・Ⅶ期の土器がどちらも出土しており、３Ｃ・３Ｇ・７は判断する器種が出土していないといえる。ただし、７の蓋のつまみから判断すると、ここでは少なくともⅦ期のものが存在すると言えるだろう。残念ながら筆者の編年基準では、横穴式石室の土器をⅥ期の新古に分けることは難しい。

実年代については高霊系土器と同じく、明確な年代推定資料が出土していないため、三嘉Ⅵ期の始まりが大加耶の滅亡年である562年頃を上限とするという以外に拠り所がない。藤井氏の年代観については先に見たが、崔秉鉉氏は３Ｊ・９Ａ・９Ｆを氏の１段階、６世紀中葉にあてている。

（2）蓋杯から高杯へ

高霊系土器の蓋杯、新羅系土器の有蓋高杯が、埋納された土器のなかでも、かなりの比重を占めることは、出土土器の一覧をみると容易に理解することができる。竪穴式石室に納められた個数は、１Ａの蓋杯10個を除けば、蓋杯４個が１Ｃ・１Ｇ・２Ｂ・６Ｂの４例、同２個が１Ｂの１例、また有蓋高杯は４個が１Ｄ・２Ｅ・２Ｃ・３Ａの４例、２個が１Ｅ・３Ｃ・３Ｈ・８Ｂの４例を数え[28]、４個例と２個例に集約することができる。また火葬墓の可能性をもつという３Ｊも、台付椀に蓋を被せたものをその代用品とみると、これも４個例に数えることができるだろう。６Ｂでは高杯（13）の脚部を打ち欠いて数を合わせており、数の一致は単なる偶然でなく厳然たる法則性があるといえる。

１Ａは１号墳造営の契機となった主室であり、土器の数量は従室に納められたものより相対的に多くなったとも考えられようが、蓋杯10個の内訳は小型品が４個、大型品が６個あり、前章で検討したように、これを同一器形の法量による器種分化とするならば、これも４個例とすることが可能かもしれない。

また横穴式石室においても単次葬の９Ａは、２個の有蓋高杯を納めている。８Ｃは盗掘を受けているものの、Ⅵ期の有蓋高杯４個、Ⅶ期のものが２個というように数が揃っており、比較的土器がよく残っているのではないかと感じる。さらに主室９ＦではⅥ期の有蓋高杯の大型品が６個出土しており、まさしく１Ａの蓋杯大型品と相通じるものである。このようにその他の器種がバラエティに富むのに対して、蓋杯・有蓋高杯には厳密な数量的規定が存在している。

供膳土器としての蓋杯や有蓋高杯の性格は、被葬者に食物・飲物を供献するものであり、葬送時の祭祀、あるいは死後の世界で使用するために納められたとみるのが一般的である[29]。実際に加耶古墳の高霊池山洞古墳群では有蓋高杯・有蓋短頸壺・蓋杯などから魚骨・鳥骨・貝類などが出土している例がある[30]。

さて４個あるいは２個という定数の蓋杯と有蓋高杯がⅡ期～Ⅶ期を通して、墓室に納められていることから、両者がもつ意味には共通性があり、しかも加耶が新羅によって併合された後も、そのことに変化がなかったことを確認することができる。Ⅵ期に新羅土器となり、横穴式石室を主体とする墓制に変化するが、横穴式石室を主室とする３・８・９号墳において墳丘内に追葬用の石室を造り続けることからも判るように、加耶から新羅に移行しても古墳に葬られたのは基本的に在地の人々であり、土器の性格もほとんど変化がなったと考えられる。また前節で少しふれたが、慶州において同時に併存する、系譜の異なる高杯Ａと高杯Ｂが、三嘉古墳群において時間差をあらわすのは、加耶の人々が有蓋高杯を蓋杯に代わるものとして採用したために他ならないだろう。新羅の高杯の中でまず低脚のものが現われる所以がここにあるだろう。

５．副葬土器の特徴

（1）２個と４個の意味

以上のように、副葬土器の特徴として蓋杯と高杯の数量が２個と４個に明確に分かれることを

挙げることができる。このことは被葬者間にある何らかの差異の表出と見ることができるだろう。蓋杯や有蓋高杯４個を基本セットとすると、１Ａ・９Ｆの初葬（主室）にはこれに加えて、大型のものが６個加わり、反対に２個の方は供膳される品数が少なくなっているのである。１Ａ・９Ｆは主室であり、従室のものより優位にあることは容易に納得することができる。これに対して４個と２個の数量差はどのように理解すべきだろうか。まず頭に浮かぶ、性別差あるいは年令差について検討を加えよう。

性別差については門田誠一氏が紡錘車に着目し、これによる性別判定を行なっている。門田氏は礼安里古墳群を中心として人骨から得られる性別データや慶州地方の夫婦墓である双円墳などの検討を通して、紡錘車が収められる墳墓には女子が埋葬されたものとした[31]。三嘉古墳群でも紡錘車がⅤ期以降の石室、２Ｅ・２Ｃ・９Ａ・９Ｆの四遺構から出土している。２Ｅ・２Ｃからは４個の有蓋高杯が収められているのに対して、９Ａでは２個の有蓋高杯が出土しており、ここでも門田氏の考えが適用できるならば、この差異は性別差とみなすことは難しくなる。

ついで年令差について木棺の検討から考えてみよう。報告書では木棺の法量について、棺釘や木質の残存状況から８例が復原推定されている。１Ａが長220㎝、幅70㎝あり、１Ｃ・２Ｃ・３Ａが長180㎝、２Ｄが長172㎝、１Ｄが長130㎝、１Ｅ・１Ｆが長110㎝である。今一度これらの蓋杯・有蓋高杯の個数をみると、１Ａは10個、１Ｃ・２Ｃ・３Ａ・１Ｄが４個、１Ｅが２個で、２Ｄ・１Ｆが不明である。「伸展葬」で遺骸を直接木棺に納めたという前提で、かつ身長と年令が比例するものとするなら、木棺の最も小さな１Ｅに２個の有蓋高杯が収められているのは注目してもよいだろう。

しかし４個の有蓋高杯が130㎝の木棺を収める１Ｄでも出土している。木棺に遺骸を収める際には、少なくとも10㎝は余裕がほしいだろう。大人でも背の低い人はもちろんいるだろうが、身長120㎝となれば、やはり一般的には子供と見なさなければならないだろう。同じ加耶地域の金海礼安里古墳群では、４～７世紀にわたる人骨が210体分が出土しており、成人の推定身長は男子が159.4～169.7㎝の範囲、平均164.7㎝、女子が143.8～158.4㎝、平均150.8㎝という数値が導き出されている[32]。木棺法量が172㎝以上の１Ａ・１Ｃ・２Ｃ・２Ｄ・３Ａは成人（大人）用、130㎝以下の１Ｄ・１Ｅは未成人（子供）用とみてほぼ間違いないだろう。したがってこの２個と４個の差異は仮に年令であるとしても、大人用・子供用といった単純な区分ではない。

１Ｅの木棺の長さは110㎝である。木棺に遺骸を収めるには少なくとも10㎝ほどの余裕が必要であるなら、１Ｅの被葬者の身長は100㎝以下となる。身長100㎝ならば、被葬者の年令はいくつぐらいとすることができようか。現在とは年令によって若干の身長差がある可能性もあり、やはり礼安里古墳群から検出された人骨資料から考えてみたい。残念ながら礼安里の報告書では成人前の人骨については推定身長が明記されていない。遺構実測図の中に描かれた人骨を計測し身長を求めることにする。過程は省略するが、個体差が大きいものの、５、６歳で身長がほぼ100㎝に達しており、したがって１Ｅの被葬者の年齢は５、６歳以下とすることができる。この年齢はふつう古代の成人儀礼年といわれる11～15歳よりさらに低い。

	年齢区分		男性	女性	不明	小計	合計
未成人	1箇月	新生児	—	—	2	2	59 (28.1%)
	1歳	乳　児	—	—	5	5	
	6歳	幼　児	—	—	33	33	
	12歳	小　児	—	—	11	11	
	20歳	若　年	0	5	3	8	
成人	40歳	壮　年	13	28	4	45	151 (71.9%)
		壮年～熟年	3	7	1	11	
	60歳	熟　年	11	14	0	25	
		老　年	2	1	0	3	
		不　詳	22	10	35	67	
合　計			51	65	94	210	

表3．礼安里古墳群出土人骨の性・年齢構成

現代では子供を年令によって乳児・幼児・児童（小児）…というように呼ぶが、古代においてもある年齢を境に成人儀礼前の子供をさらに区分する認識がなかっただろうか。礼安里古墳群出土人骨の年齢構成は表3のとおりである。20歳未満が59体（28.1%）、20歳以上が151体（71.9%）である。人骨の出土していない遺構は23基あり、未成人の人骨は残りがよくない傾向があるので、未成人の実際の比率はより高くなるものと考えられている。ところで古代における乳幼児の死亡率が高いことは一般に予想されるところであるが、礼安里でも未成人の死亡率は幼児期がもっとも高くこのことを裏付けている。幼児期を越えれば、成人となる確立は高くなり、幼児期が一つの節目となるようである。このことから古代の人々も子供時代の中でも幼児期以前をより未熟なものとして認識していたことは想像に難くない。供膳土器の数に差異が生じるのはこのようなことに起因することも考えられるのではないか。前述のように三嘉古墳群の９Ａは２個の有蓋高杯が収められており、この石室は横穴式石室であるが追葬が行なわれていない。この事例は９Ａの被葬者が幼くしてため、追葬すべき親族を残さなかったと考えることも可能である。

このほかにもその個数差については、戸主の配偶者・子・兄弟といった親族関係の差、戸主と特別な関係をもつ非親族と親族の差などという考え方もできるが、これを検証するのは難しい。乏しい資料からではあるが、ここではこれを年令差と捉えることも可能であるということで満足し、事例が増えた時点で再度検討を試みたい。

（２）土器の配置状況と性格

土器は墓室の中でもいくつかに分けて置かれることがあり、そこには葬送を執り行なう者の何らかの意識が反映されているとしてもよかろう。三嘉の横穴式石室は盗掘・破壊を受けたものが多く、９Ａを除いてほとんど原状を保っていないが、竪穴式石室には比較的原状を維持しているものが少なくない。ここでは主に竪穴式石室における土器配置について検討を行なうこととしたい。

竪穴式石室における土器の配置状況は、以下の三箇所を想定できる。

①木棺内に置かれたもの[33]

②木棺外、頭位側におかれたもの

③木棺外、足位側におかれたもの

しかしながら、頭位・足位を決める材料に乏しく実際には、

A類：木棺内と木棺外の両短壁側の三箇所におかれるもの（①・②・③）

B類：木棺外の両短壁側に二分して土器がおかれるもの（②・③）

C類：木棺外の一方の短壁側にまとめて土器がおかれるもの（②あるいは③）

という三類型に分けることが可能である（図11）。

A類には6Bと1Bの2例がある。6Bは棺内にコップ形土器、木棺外の一方の棺上に蓋杯4点、反対側に長頸壺1点、広口壺1点が出土した。1Bは棺内に有蓋の把手付椀形土器、木棺外の一方に蓋杯2点、反対側に有蓋両耳鉢[34]2点をおく。

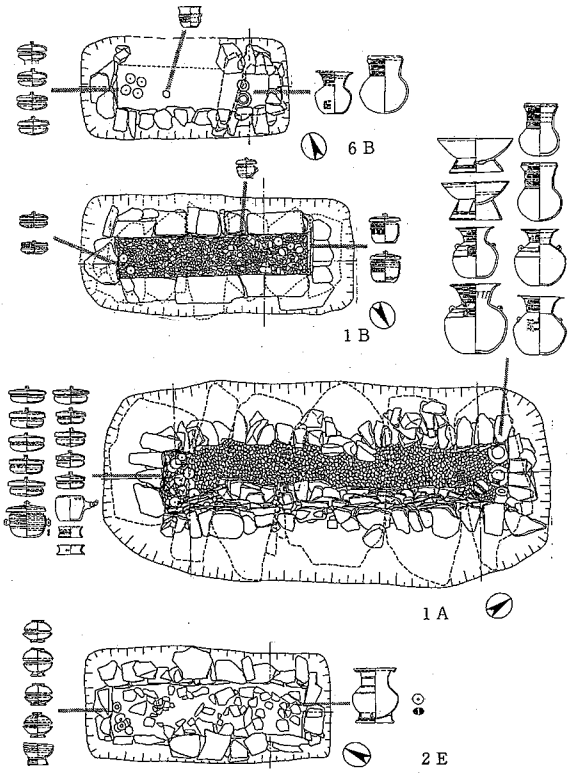

図11　土器の配置状況（1／100）

B類としては1A・2E・3Aの3例がある。1Aでは石室の北短壁に長頸壺2点・器台2点・広口四耳壺4点、南短壁に蓋杯（大）6点・蓋杯（小）4点・器台2点・有蓋両耳鉢1点・把手付鉢1点が出土した。南短壁の土器は床面に接しておらず、台あるいは箱状のものの上に置かれていたようである[35]。2Eでは石室の北短壁に有蓋高杯4点・台付椀1点、南短壁に長頸壺1点が出土した。また3Aは石室南西短壁側に有蓋高杯4点、台付椀1点がおかれているが、東北短壁側は盗掘に用いられた道具が発見されており、こちら側に置かれていた土器が抜き取られた可能性が高い。3Aでは他遺構で見られるような長頸壺や短頸壺などの容器類が欠如しており、この裏付けとなる。

C類は1C・1D・1E・2B・2Cなどその他多くの例がこれに属する。出土土器については一覧（図6・9）を参照されたい。

頭位がわかる資料としては、1Aから耳環1点が出土しており、木棺の南西が頭位であることが判る。こちら側には蓋杯があり、報告書では蓋杯（有蓋高杯）のある方向を頭位と推定している[36]。

A・B類の配置別の土器をみると、おおむね一方に蓋杯・有蓋高杯を代表とする供膳形態、もう一方は長頸壺・広口壺・短頸壺をはじめとする貯蔵形態、木棺内には把手付のコップ状土器が納められていることがわかる。1Aの蓋杯は床面より浮いた状態で出土しており、まさしく膳上にのせられたまま墓に入れた可能性もある。また鉢類が1Bでは貯蔵形態として納められているが、これは鉢の中でも縦型のものを選び、両耳を除去してそれを代用したものと見ておきたい。

このように副葬された土器は配置される場所ごとに共通性があり、位置によって土器の機能（用途）に差異があることを示唆してくれている。ただ墓室間の配置状況の差異については、とくに意味は感じられない。C類についてはいずれもV期以降の比較的新しい時期のものであるが、A・B類にもこの時期のものが含まれており、時期的な推移とは考えられない。また被葬者間の差異も見出すことは難しく、これは葬送意識の変化というよりは葬礼を執行する側の者が、それぞれの意味をもつ土器を一括して納めたのか、それとも別々に配置したのかの差異のようである。

では両短壁に分けられた土器にはどのような性格の差異が考えられるのだろうか。前に述べたように、両者は機能上供膳形態と貯蔵形態に明確に分かれる。壺形土器は貯蔵形態として土器自身に意味をもつのではなく、そこに入れられた何らかのものに意味を見いだすべきであろう。それは仮器として「もの」を収めることが省略される場合もあっただろうが、本来何かが入っていたと見るべきである。長い年月を経て腐食し消滅したのであれば、それは有機質でつくられた可能性が高い。有機質であればそれは食物や布などが考えられるだろう。勝手な憶測になってしまうが、土器の用途から、供膳土器は調理済みの食物がおかれ、貯蔵土器には米・豆などの食材が納られたと考えられないだろうか。出土土器が儀礼的意味をもつのか厳密な意味での副葬品にあたるのか判断するのは難しいが[37]、供膳土器は葬送祭祀における死者のためにつくられた料理を入れた容器であり、いっぽう貯蔵土器は死後の世界へ向けた食物などをいれた容器とみては如何だろうか。

おわりに横穴式石室の土器の配置について簡単にふれておきたい。その状況の把握は難しいが、基本的には羨道から玄室に入ったすぐの袖部に追葬時のものとともに置かれているようである。3F・7・8C・9A・9Cでこの事実を確認できる。その中で8Cでは時期のことなる有蓋高杯が、蓋は蓋、高杯は高杯で重ねた状況で出土しており、追葬時に以前副葬された土器とともに整理された状況を示している。また7・8C・9Fは羨道入口に土器が1点ずつ置かれており、袖部に置かれた土器とは明らかに性格の異なるものである。恐らくその位置から推量すれば石室を閉塞する際の儀礼に使用されたものであろう。その器形は7（173）・9F（142）が細頸壺で、ともに口縁部が欠失した状態で出土した。その形状は酒器を連想させるものであるが、いずれにせよ液体をいれた容器のと考えられるものである。8Cのものは深い椀形土器（169）である。

（3）液体を入れる容器

つぎに棺内から出土した土器の用途について考えてみたい。棺内から土器が出土しているのはA類の6B・1Bの二例のみである。被葬者のかたわらに単独でおかれ、ともに把手の付く椀形の土器であるのが特徴である。6Bのそれは把手がはずれた状態で出土しているが、土器の形態から液体を飲むのに適した容器である。日本の事例になるが、コップ形の盌形土器について「共食の場において死者に献じる水を入れる容器[38]」という藤原学氏の指摘は重要である。酒を入れた可能性もあると考えられるが、三嘉でもこれが援用できるだろう。

また藤原氏は棺内に土器が入るのは「遺体が仮安置されていた場から木棺ごと墓に搬入されたもの」と見ている。とすれば棺内に土器が残るのは、単にそれを供膳土器側にまとめなかった結

果ともいえ、他の遺構でも液体を入れる容器を探す必要が出てくる。

ではA類以外の配置状況において、液体を入れた容器はどれにあたるのであろうか。まず1Gの小型の容器（67）は実測図には表れていないが、その報告書写真によると把手のはずれた痕跡があり、本来は把手付のものでありその容器として妥当なものである。

ついで脚台付容器（台付椀）に注目したい[39]。三嘉ではⅥ期以降台付椀が登場し、この器種は2E（82）・3A（99）・3F（114）・3J（106）・7（174）・9A（118）・9F（143・144）の墓室で出土している。土器の配置が足位と頭位に分かれるB類の2E・3Aの場合、台付椀は有蓋高杯とともに頭位から出土しており、これも供膳土器として捉えることができる。有蓋高杯が狭義の食物を入れたものならば、椀はまさに液体を入れるのに相応しい器形である。内傾する「蓋受け」をもつ有蓋式高杯はその構造上、液体を飲むことは難しい。

さらに赤褐色軟質土器もその可能性をもつ。三嘉古墳群で出土した土器の総数174点があるが[40]、その内訳は陶質土器が166点、赤褐色軟質土器が5点（28・89・150・170・175）、黄褐色軟質土器（155）一点、灰青色軟質土器（18）一点である。18はいわゆる「瓦質焼成土器」と考えられ、155は報告書写真図版では赤褐色土器と記されているように、やや暗い色調の赤褐色軟質土器と判断される。陶質土器と赤褐色軟質土器は容易に区別することが可能であり、赤褐色軟質土器は陶質土器の代用品でなく明確な意図をもって搬入された土器と考えてよいだろう[41]。1A（28）・2C（89）はほぼ同形の把手付鉢、8C（170）・9C（155）・9F（150）は器形にバラエティがあるがすべて鉢形土器になる。7（175）はセットとなる土器は失われており蓋のみが出土している。このように赤褐色軟質土器は鉢形土器が多く、これらも1A・2Cで片方に把手が付いているように液体を飲む容器としての蓋然性は高い。

6．墓道の設定と単位群の抽出

水野正好氏は群集墳の群構造の分析に「墓道」という概念を導入し、それによって「単位群」を抽出し群集墳の構造と性格を復原する[42]。「墓道」とは古墳築造時の資材運搬の道であり、葬送の道であるとともに、古墳築造後は祭祀や追葬のための道となるものである。水野氏は墓道を根道・幹道・枝道・茎道の四種にわけ、最後の茎道によって包括できる古墳のまとまりを「単位群」として掌握し、単位群は数代にわたる家族に与えられた墓域として、戸主の死を契機に造墓されるものとする。そして群集墳の構造を分析することによって、地域の氏族構造や政治構造が浮かびあがってくると説く。

水野氏の方法が韓国の古墳群の分析においても有効であるかは未知数であるが[43]、少なくとも三嘉古墳群では単位群を抽出する方法として墓道を想定することは実効性があると考えられる。谷の北側の支群に対して、3・7・9号墳は尾根沿い（墓道A）に、1・2号墳は緩やかな傾斜の尾根の先端部（墓道B）を周りこむように墓道を設定することができる[44]（図12）。なお古墳群の下を通る道路は国道33号線であり、北上すれば高霊・星州、南下すれば晋州・固城にいたる。古代においても加耶諸国を縦断する主要ルートであったと考えられる。

墓道設定の根拠として、まず横穴式石室の３・７・９号墳はその開口方向から求めた。各古墳の横穴式石室はいずれも尾根側にむかって開口しており、追葬・祭祀などに使用される墓道がこちら側にあったとみて無理はない。

１・２号墳を結ぶ墓道Ｂについては墳丘内追葬が主室に対して山側に行なわれる点に着目した。とくに１・２号墳は主室を支点として従室が扇状に広がっており、これは墓前祭祀の場を想定すると理解しやすいだろう。すなわちここでは墓前祭祀の場を結ぶかたちで墓道が設定できる。

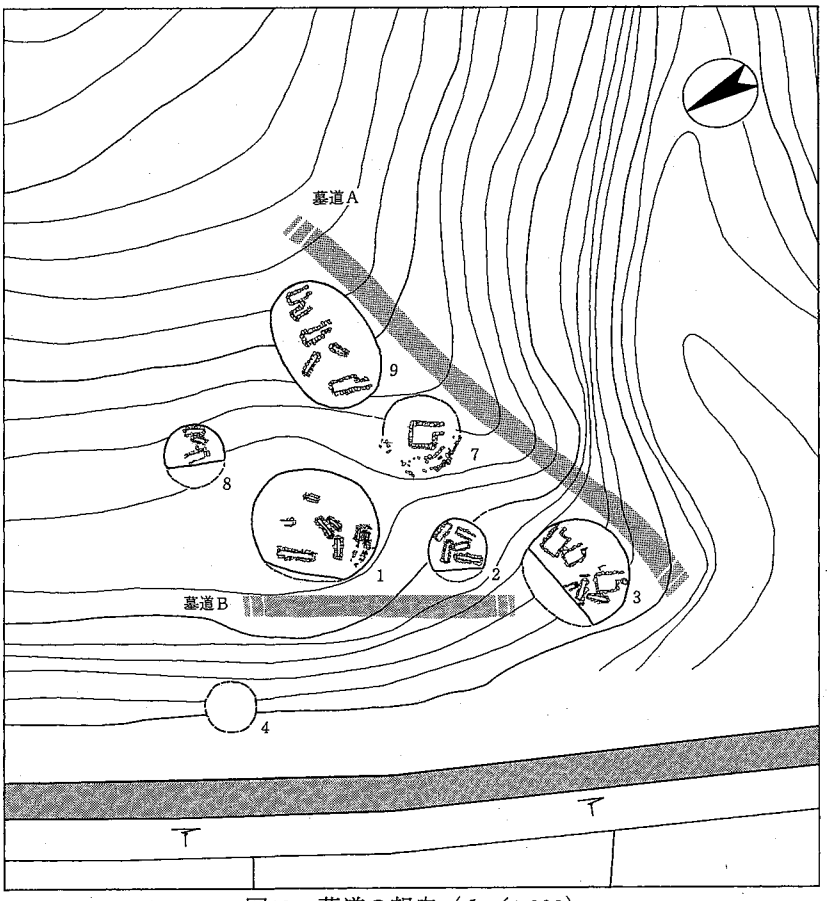

図12　墓道の想定（１／1,000）

このように一見すると一支群に見えるものが、墓道を設定することによって、二つの単位群に分かつことができる。８号墳は１・２号墳の墓道から枝を伸ばして連結するのが、妥当とも思われるが、現時点では保留しておきたい[45]。

墓道を共有する墳墓間には何らかの共通的性格を想定することが一般的である。墓道Ａに属する１・２号墳は、ともにⅢ期に築造をはじめ、Ⅵ期古段階に追葬を終えている。竪穴式石室で構成される多槨墓である。いっぽう墓道Ｂに属する３・７・９号墳は遺物の残りが悪いため、初築時期の確定は難しいが、いずれにせよ加耶滅亡を前後する時期に造られた、主室を横穴式石室とする古墳である。以上のように墓道を共有する古墳は築造時期をほぼ同じくし、墓制においても共通性が見られる。

ところが３・７・９号墳の横穴式石室は、同じ墓道に属しながらもその構造をみると、平面形態や構築方法に差異が著しい。その横穴式石室（図５）は平面形態が長方形のもの（幅を１とすると長さが２以上：９Ｆ・９Ｃ・９Ｂ・９Ａ）と正方形に近いもの（３Ｆ・３Ｇ・３Ｉ・７）がある。前者は竪穴式石室の系譜をひくもので、天井は単純に扁平な蓋石で覆ったものであり、後者は天井まで残るものはないが、穹窿式天井が想定されている。墓道でくくることのできる古墳相互の関係は今後の課題である。

7．おわりに

以上三嘉古墳群の土器と葬制を中心として検討を加えてきた。その内容をまとめると次のとおりである。

1．高霊系土器について、製作技法に着目し四期に編年した。長頸壺は丸底工程の省略、蓋杯はヘラケズリ後のナデ調整の省略を時期設定の指標とした。高霊系土器はその末期にいたり粗雑化・小型化していくことが認められる。

2．慶州系土器について、有蓋高杯の形態から編年を行なった。一括性のある遺構を選択、検討することによって、高杯（蓋）Ａ・Ｂが時期差を表すことを確認した。また高坏Ａを指標とするⅥ期は小期を設定して二分した。

3．墓室に納められる蓋杯（高霊系）・有蓋高杯（慶州系）の数量が、２個と４個の二者に明確に分かれることを示した。これは葬制における土器の性格が、新羅への編入後も不変であったことを意味する。これまでも横穴式石室が導入された後にも墳丘内に追葬用の石室を設けることから、在地の人々が新羅編入後も従来の方法で埋葬されていたことが指摘されていたが、土器の検討からもその連続性を示すことができた。したがって慶州において共存する系譜のことなる高杯（蓋）Ａ・Ｂが三嘉では時間差を表す理由についても、蓋杯の代用品として短脚の高杯Ａを選択したためと推定した。

4．蓋杯と有蓋高杯が２個と４個に分かれる理由について、木棺ならびに礼安里古墳群の人骨資料の検討から、２個について幼児以下の年齢のものを埋葬した可能性を導きだした。

5．竪穴式石室の土器の配置状況を整理し、それが頭位と足位側に分かれる場合、土器は貯蔵形態と供膳形態の二者に分かれることを確認した。これは葬送を執り行うものの意識の反映として両者の用途に差異があることを指摘した。

6．棺内に副葬された土器を、その形態から液体を入れた容器と推定した。またこれ以外にも形態は異なるが、いくつか水の容器と推定されるものがあることを指摘した。

7．谷北側の支群について墓道の概念を導入し、これを二つの単位群に分離した。

三嘉古墳群についてはこれまでも加耶土器から新羅土器へ、そして竪穴式石室から横穴式石室へ変化することが述べられてきた。それらは非常に明瞭な形で、政治的変化が土器や墓制といった考古学が得意とする分野に反映されたため、かえって詳細な検討がなされなかった嫌いがあった。小考のテーマは比較的良好に土器が遺存した三嘉古墳群に注目し、土器ならびに葬制をより詳細に検討することによって、加耶から新羅へ移る社会的な変化を明らかにすることにあった。結果としてある程度新知見を示すことができたが、全体としては断片的、個別的にならざるを得なかった。積み残した課題は多いが、表題に掲げた加耶から新羅への社会変遷を考える上で、筆者自身のステップになったと信じる。今後他の加耶地域の古墳群についても同様に検討し、相互に比較することによって再考を期したい。　　（1996年８月８日　脱稿）

（謝辞）小考を作成するにあたり下記の方々から有益なご教示を得た。深く謝意を表する次第である。

内田好昭、大竹弘之、亀田修一、定森秀夫、申敬澈、高橋潔、田中俊明、中村潤子、平方幸雄、藤井和夫、藤原学、朴天秀、松井忠春、松波宏隆、丸川義広、宮川禎一、門田誠一、山本雅和

（敬称略、五十音順）

註

（1）沈奉謹『陜川三嘉古墳群』東亞大学校博物館、1982年

（2）以下の論文が三嘉古墳群の陶質土器を扱った主要論文である。本文中の各氏の見解は特に註を設けない場合、すべて以下の論文に基づく。

①禹枝南『大伽倻古墳의 編年－土器를 中心으로－』서울大学校大学院硕士学位論文　1986年。

②同上「大伽倻古墳의 編年－土器를 中心으로－」『三仏金元龍教授停年退任紀念論叢（Ⅰ）』一志社1987年（定森秀夫訳『古代朝鮮と日本』古代史論集4　名著出版　1990年）。

③定森秀夫「韓国慶尚北道高霊地域出土陶質土器の検討」『東アジアの考古と歴史』上　1987年。

④郭鍾喆「韓国慶尚道陶質土器の地域相研究－所謂高霊系土器を素材として－」『古代文化』第40巻第2号　1988年。

⑤藤井和夫「陜川三嘉古墳群の編年について－伽耶地域古墳出土陶質土器編年試案Ⅵ－」『神奈川考古』第24号　1988年。

⑥同上「高霊池山洞古墳群の編年－伽耶地域古墳出土陶質土器編年試案Ⅴ－」『東北アジアの考古学［天池］』六興出版　1990年。

（3）趙栄済氏は定森秀夫氏が泗川・固城タイプとしている広口壺A類を水平口縁壺を呼び換え、分布の中心は泗川・固城のほかに晋陽・晋州ならびにその周辺地域まで及んでいるとする。また三角透窓高杯についても慶州・釜山地域でも出土しているが、晋陽・晋州を中心に山清・陜川・固城など西部慶南地域に分布の中心があるとする。朴升圭氏はこれを受けて加耶土器の「小地域型式」として新たに晋州式を提唱している。ここでは朴升圭氏の呼称にしたがった。

①定森秀夫「韓国慶尚南道泗川・固城地域出土陶質土器について」『角田文衛博士古稀記念古代学叢論』1983年。

②趙栄済「水平口縁壺에 対한 一考察－西部慶南伽倻後期土器의 一様相－」『慶尚史学』創刊号　慶尚大学校史学会。1985年。

③趙栄済「三角透窓高杯에 対한 一考察」『嶺南考古学』7　1990年（高正龍訳『韓式系土器研究』Ⅲ　1991年　韓式系土器研究会）。

④朴升圭『一段長方形三角透窓高杯에 対한 考察』東義大學校大学院硕士学位論文　1990年。

（4）禹・定森・郭・藤井（2）前掲論文参照。

（5）田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」　加耶琴だけが残った』吉川弘文館　1992年。

（6）金鍾万『短脚高杯에 歴史性에 対한 研究』、忠南大学校大学院硕士学位論文　1990年。

（7）ここで～系というのは、～式、～タイプに対応するものである。またもう一つの意味として、新しい土器型式が入ってきても在地の土器が一掃されるわけではないため、これをも含めてその地域の土器の総体を指す用語として用いる場合もある。

（８）金宰賢「伽耶故地出土短脚高杯에 関한 研究」『上古史学報』第７号　韓国上古史学会　1991年。

（９）１号墳のＨ遺構は箱式石棺状の石槨で白磁を出土している。これは朝鮮時代のもので古墳とは直接関係ないので除外している。

(10) 横穴式石室の研究者は、３号墳の横穴式石室に対してその石室構造からＧをもっとも古いものと捉えている。たとえば東潮氏はＧ→Ｉ→Ｆ、曺永鉉氏はＧ→Ｆ→Ｉという変遷を考えている。Ｆから出土した高霊系土器については評価が低いようであるが、これは床面から出土しており混入とは考えにくい。また九号墳の初築石室であるＦと同じく墓室のまわりに竪穴式石室がともなっている状況をみると、Ｆは報告書どおり３号墳の主室と考えてよい。近接した時期に築かれた石室をその構造からのみで先後関係を判断することは難しい。

①東潮「朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第47集　1993年。

②曺永鉉『三国時代横穴式石室墳의 系譜와 編年研究－漢江以南地域을 中心으로－』忠南大学校大学院碩士学位論文　1989年。

(11) このうちＥは墓室構造が１Ｈと同じく箱式石棺と類似するものであり、朝鮮時代の可能性があるだろう。

(12) 報告書の図面のスケールは、石室法量と合致しない。スケールの１ｍを２ｍと考えると、ほぼ石室法量と一致するので、これを基に図面を調整した。

(13) 沈奉謹『陜川倉里古墳群』東亜大学校博物館　1987年。

(14) 門田誠一『海でむすばれた人々　古代東アジアの歴史とくらし』同朋社出版　1993年。

(15) ２Ａ長頸壺の高さは21.5㎝と本文中にあるが、図面スケールにあわせると約25.5㎝となる。ここでは前者の数値で図を調整している。

(16) この長頸壺について発掘報告書では、丸底であるが、焼成時に凹み平底のようにみえる。焼き歪んでいるため正位を維持できないとする。

(17) 長頸壺の製作方法については亀田修一氏の御教示を得た。また西弘海氏の論文にも詳しい。西弘海「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』真陽社　1986年。このほかに底部外面をヘラケズリし丸く加工する方法もある。

(18) 趙栄済・朴升圭『陜川中磻溪墳墓群』慶尚大学校博物館　1987年。

(19) 藤井氏は１Ｃを１Ａと同じくⅦ期に所属させている。筆者が高霊系土器の最後尾に位置づけるのとは際だった差異をみせている。この相違点についてもう一度検討しておく。藤井氏が１Ｂを１Ｃの後に位置付けた理由は把手付有蓋鉢の編年観にあるという。すなわち、長頸壺が出土していないため、両遺構から出土している把手付有蓋鉢を同一系譜上にあるものとみて、１Ｃと１Ｂの先後関係を確定したのである。さて図13は陜川ではないが同じく高霊系土器を出土する固城郡の栗垈里２号墳である。主室の南と東側にそれぞれ追葬と考えられる二つずつの墓室をもつ。盗掘を受けており遺物の残りはよくないが、２号石室からは１Ｂと同様な把手付有蓋鉢を３号石室からは１Ｃと共通する把手付有蓋鉢が出土している。報告書によれば両者はほぼ同時期に造られたと考えられ、遺物からは前後関係を認定るだけのものはないという。その配置状況から築造順序を見ると、２号石室が３号石室より先に築かれたとはまず考えられない。同時築造あるいは２号が築かれたのちに３号を 設置したとみるのが素直だろう。したがって両者が同時併存したと捉えることは難しくない。

金正完・権相烈・任鶴鍾『固城栗垈里二号墳』国立晋州博物館　1990年。

(20) 容積の計算式は、(口径の1/2)^2 ×3.14×器高と単純化しており、厳密なものではない。

(21) 西弘海「土器様式の成立とその背景」前掲書（17）に所収。

(22) 崔秉鉉「新羅後期様式土器의 成立試論」『三仏金元龍教授停年退任紀念論叢（Ⅰ）』一志社。1987年。

(23) 付加口縁長頸壺も数量的にまとまって出土しているが、器形的変遷を把握できないでいる。

(24) 金鍾万（6）前掲書。

(25) 皇龍寺初期土器とは6世紀中葉に創建が開始される皇龍寺の土器の中で、型式学的に最も先行する一群の土器をいう。皇龍寺講堂東北側で検出された土器廃棄坑では、短脚と長脚の高杯が共伴している。

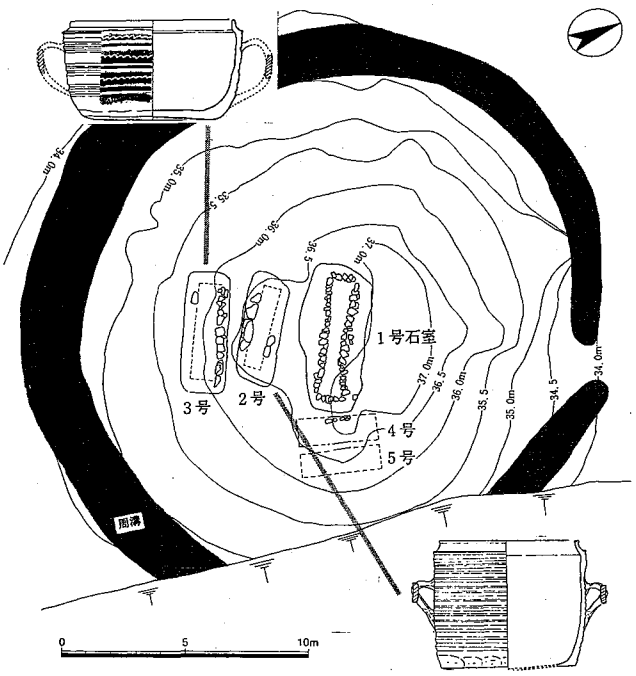

図13　固城栗垈里二号墳と出土土器

崔秉鉉「皇龍寺址出土 古新羅土器」『尹武炳博士回甲紀年論叢』尹武炳博士回甲紀年論叢刊行委員会 1984年。

(26) 禹順姫『慶南地域의 6世紀土器研究－土器定型化過程에 対해－』慶北大学校大学院硯士学位論文 1989年。

(27) 崔秉鉉（22）前掲書

(28) ３Ｃ・３Ｈ・８Ｂは著しい破壊をうけているが、土器は短壁側に現状を保っている。

(29) 小林行雄「黄泉戸喫」『古墳文化論考』平凡社　1976年。

(30) ①尹容鎮・金鍾徹『大伽倻古墳発掘調査報告書』　高霊郡　1979年。
②金鍾徹『高霊池山洞古墳群』　啓明大学校博物館　1981年。

(31) 門田誠一『海からみた日本の古代』　新人物往来社　1992年。

(32) ①『金海礼安里古墳群Ⅰ』　釜山大学校博物館　1985年。
②『金海礼安里古墳群Ⅱ』　釜山大学校博物館　1993年。

(33) ６Ｂ・１Ｂの土器検出状況をみると、石室短壁に集められた複数の土器から１点離れておかれている土器は、棺の推定位置の範囲内の床面上に正位の状態で検出されているため、これ棺内のものとみなした。

(34) ただし把手は外れてた状態で出土している。

(35) 木棺は中央に置かれていたことが棺釘の出土状況から明らかである。

(36) ほかに頭位のわかる資料としては２Ａで出土した大刀が柄を南西側に向けており、やはり南西側が頭位方向であることがわかる。ただし２Ａからは土器が出土していない。

(37) 亀井正道「信仰から儀礼へ　祭祀遺跡」『世界考古学大系』第３巻　日本Ⅲ（古墳時代）　平凡社 1959年。

(38) 藤原学「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集　乾』　奈良

明新社　1985年。

(39) 山本博氏は『日本書紀』武烈紀に出てくる葬送歌中の「…玉笥には飯さへ盛り、玉盌に水さへ盛り…」の盌（もひ）に対して、土師器・須恵器の中の円筒形容器・把手付容器・台脚付容器という三つの器種を示している。また亀田博氏によれば日本の後期古墳では杯とともに提瓶を棺内に入れることも多く行なわれ、ときには杯類を棺外に出し提瓶や壺を棺内に収める場合もあるという。提瓶は水をいれる容器であると同 時にそのまま飲むことも可能なものであり、これも被葬者に水を供するものと考えてよい。

①山本博『古代の製鉄』学生社　1975年。

②亀田博「後期古墳に埋葬された土器」『考古学研究』第23巻第４号　1977年。

(40) 土器は蓋のあるものはこれをセットとして一点と数えた。また器台はセットとなる壺などとは別個に一点として数えている。また二Ｃの有蓋把手付鉢は蓋が陶質土器、鉢が赤褐色土器であるが、一括して赤褐色土器として計算した。

(41) 藤原学氏は後期古墳内に須恵器とともに搬入された土師器の中で把手付のコップ形の盌形土器に注目し、水を入れる容器とする。藤原学（38）前掲論文。

(42) ①水野正好「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』６　講談社　1975年。

②同上「群集墳と横穴式石室と」『図説発掘が語る日本史』４　新人物往来社　1985年。

(43) 下記の論文でも、加耶古墳群に対して墓道設定が行なわれているが根拠は示されていない。

松井忠春「伽耶の群集墳」『季刊考古学』第33号　雄山閣　1990年。

(44) 報告書には調査区全体図がないため、古墳分布図に各古墳平面図を代入して作図した。

(45) 調査は工事直前まで墳丘の存在した地点だけを対象としている。加耶の古墳群では完全に墳丘が流失する場合が珍しくないので、８号墳の周囲にも古墳があった可能性を否定できない。そのため８号墳については保留することにする。